

花月

世阿弥作

ワキ 僧

狂言 清水門前の者

シテ 花月

地は 京都

季は 春

「風に任する浮雲の。く。とまりはいづくなるらん。

「是は筑紫彦山の麓に住居する僧にて候。我俗にて候ひし時。子を一人もちて候ふを。七歳と申し、春の頃。いづくともなく失ひて候ふ程に。これを出離の縁と思ひ。かやうの姿と為りて諸国を修行仕り候。

「生れぬ先の身を知れば。く。憐れむべき親もな

し。親のなければ我ために。心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず。野に臥し山にとまる身の。是ぞ誠の住家なる。く。

「急ぎ候ふ程に。これは、や花の都に着きて候。先づ承り及びたる清水に参り。花をも詠めばやと思ひ候。

「定めて今日は清水へ御参りなき事はあるまじく候。御供申し彼人に見せ申し候ふべし。

シテ詞

「抑是は花月と申す者なり。ある人我名を尋ねしに答へてはいはく。月は常住にして云ふに及ばず。さて花の字はと問へば。春は花夏は瓜。秋は菓冬は火。因果の果をば末期まで。一句の為にのこすといへば。人これを聞いて。

地

「さては末世のかうそなりとて。天下に隠れもなき。花月と我を申すなり。

狂言

「何とて今までは遅く御出で候ふぞ。

シテ

「さん候今まで雲居寺に候ひしが。花に心を引く弓の。春の遊びの友達と。中たがはじとて参りたり。

狂言

「さらばいつもの如くに歌を謡ひて御遊び候へ。

シテ小歌

「こしかたより。

地

「今の世までも絶えせぬものは。恋といへる曲物。実に恋は曲物。曲物かな。身はさらさらさら。さらくくくに。恋こそ寝られね。

狂言

「あれ御覧候へ鶯が花を散らし候ふよ。

シテ詞

「実にく鶯が花を散らし候ふよ。某射て落し候はん。

狂言

「急いであそばし候へ。

シテ

「鶯の花踏み散らす細脛を。大長刀もあらばこそ。花月が身に敵のなければ。太刀刀は持たず。弓は射んがため。又かゝる落花狼藉の小鳥をも。射て落さんが為めぞかし。異国の養由は。百歩に柳の葉を垂れ。桃に百矢を射るにはづさず。我は又

地

花の梢の鶯を。射ておとさんと思ふ心は。その養由にも劣るまじ。あら面白や。

「それは柳これは桜。それは雁金これは鶯。それは養由これは花月。名こそ替はるとも。弓に隔てはよもあらじ。いで物見せん鶯。いで物見せん鶯とて。履いたる足駄をふんぬいで。大口のそばを高く取り。狩衣の袖をうつ肩ぬいで。花の木陰にねらひ寄つて。よつぴきひやうと。射ばやと思へど

も。仏の戒め給ふ。殺生戒をば破るまじ。

狂言

「言語道断面白き事を仰せられ候。また人の御所望にて候。当寺の謂を曲舞に作りて御謡ひ候ふ由を聞し召して候。一節御謡ひ候へとの御所望にて候。

シテ詞

「やすき事謡うて聞かせ申さうずるにて候。

サシ

「さればにや大慈大悲の春の花。

地

「十悪の里に香しく。三十三身の秋の月。五濁の水に影清し。

クセ

「抑此寺は。坂の上の田村丸。大同二年の春の頃。草創ありしこの方。今も音羽山。嶺の下枝の滴に。濁るともなき清水の。ながれを誰か汲まざらん。ある時此滝の水。五色に見えて落ちければ。それを怪しめ山に入り。その水上を尋ぬるに。こんどゆせんの岩の洞の。水の流れに埋もれて。名は青柳の朽木あり。其木より光りさし。異香四方に薫ずれば。

シテ「さては疑ふ処なく。

地

「楊柳観音の。御所変にてましますかと。皆人手を合はせ。猶も其奇特を。知らせて給べと申せば。

朽木の柳は緑をなし。桜にあらぬ老木まで。皆白妙に花咲きけり。さてこそ千手の誓ひには。枯れたる木にも花咲くと。今の世までも申すなり。

ワキ 詞

「あら不思議や。是なる花月をよくく見候へば。

某が俗にて失ひし子にて候ふは如何に。名のつて

逢はゞやと思ひ候。如何に花月に申すべき事の候。

シテ

「何事にて候ふぞ。

ワキ

「御身は何くの人にて渡り候ふぞ。

シテ

「是は筑紫の者にて候。

ワキ

「さて何故かやうに諸国を御廻り候ふぞ。

シテ

「我七つの年彦山に登り候ひしが。天狗に捕られてかやうに諸国を廻り候。

ワキ

「さては疑ふ処もなし。是こそ父の左衛門よ見忘れ

てあるか。

狂言「なふく御僧は何事を仰せられ候ふぞ。

ワキ「さん候この花月は某が俗にて失ひし子にて候ふ程に。さてかやうに申し候。

狂言「実にと御申し候へば。瓜を二つに割つたるやうにて候。此上はいつものやうに八撥を御うち候ひて。打ちつれだつて故郷へ御帰り候へ。

シテ「さても我筑紫彦山に登り。七つの年天狗に。

地「とられて行きし山々を。思ひやるこそ悲しけれ。

地「とられて行きし山々を。思ひやるこそ悲しけれ。

まづ筑紫には彦の山。深き思ひを四王寺。讃岐には松山。降り積む雪の白嶺。さて伯耆には大山。

く。丹後丹波の境なる。鬼が城と聞きしは。天狗よりも恐ろしや。さて京近き山々。く。愛宕の山の太郎坊。比良の峰の次郎坊。名高き比叡の大嶽に。少し心の住みしこそ。月の横川の流れな

れ。日頃はよそにのみ。見てや止みなんとながめ
しに。葛城や高間の山。山上大峰釈迦の嶽。富士
の高嶺にあがりつゝ。雲に起き臥す時もあり。か
やうに狂ひめぐりて。心みだるゝ此さゝら。さら
くくくと。磨つては謡ひ舞うては数へ。山々
嶺々里々を。めぐりくゝてあの僧に。逢ひ奉るう
れしさよ。今より此さゝら。さつと捨てゝさ候
はゞ。あれなる御僧に。連れまゐらせて仏道。連

れまゐらせて仏道の。修行に。出づるぞうれしか
りける。く。